

ダンマパダ語源学研究ノート

山 崎 守 一

ブラフ教授によつて西北インドの方言で書かれた『ガーンダーリー・ダルマパダ』が公刊され、次いでベルンハルトによつて『ウダーナヴァルガ』の校訂本が出版されるに及び、パーリ文ダンマパダは、これらの伝本との比較対照という新しい視点からの再検討が可能になった。一方、リュエダースによつて東部方言で書かれたと思われる原始聖典の言語が西部インドに起源するパーリ語へ及ぼした影響のいくつかが組織的に研究され、これまで難解とされていた語句の意味もかなり解明されるようになった。その後もドイツ学界におけるパーリ語の言語学的研究は大幅な進歩を示している。しかしながら、いくつかの問題点は依然として未解決のままである。したがつてパーリ文ダンマパダを上記の伝本類と比較対照しながら、必要に応じてダンマパダの註釈書ダンマパダアッタカターを参照し、さらに先学の多くの研究文献にも言及しつつ、パーリ語をアショーク王碑文に初まる中期インドリアン語の一環として再検討することも不可欠の研究と考えられる。本稿ではパーリ文ダンマパダから *saṅkhātadhamma* と *anutthunaṃ* の2語句をとりあげ、語彙研究の一助にしたい。

(1) *saṅkhātadhamma*

この複合語は、

māse māse kusaggena bālo bhuñjetha bhojanaṃ,

na so saṅkhātadhammāṇaṃ kalam n'agghati soḷasim // 70 //

の中にみられる。*saṅkhata-* の読みを検討するに、ビルマ本・シャム本とも *saṅkhāta-* と表記する。*metre* は *śloka* であり、*pāda c* は *U—U*, *U—* でも可能である。しかし、*Suttanipāta* 70 において *saṃkhātadhammo* (*Triṣṭubh pāda*), また *Suttanipāta* 1038 において *saṃkhātadhammāse* (*Śloka pāda*) とある事実に基づいて *saṃkhāta-* と読むべきであろう。

註釈書は *saṃkhātadhamma*=*ñātadhamma*, *tulitadhamma* と解説し、*Pāli English Dictionary* には *saṃkhātadhamma*=“one who has examined or recognised the *dhamma*” と記載されている。また、Radhakrishnan は “those who have well understood the law” と、Max Müller は “those who have well weighted the

law”と訳しており、いずれもこの註釈の立場を採用したことが明らかである。

一方、この語は仏教梵語文献の中で svākhyāṭadharma として表われる。例えばダンマパダ (=Dhp) 70 に相当するウダーナヴェルガ (=Uv) XXIV 20E においては svākhyāṭadhamasya (Tibet: legs par gsuñs pa paḥi dam chos kyi) を、Mahāvastu iii 435 においては svākhyāṭadharmāṇaṃ を指摘できる。パーリ文に saṃkhāta-dhamma とあるのは、パーリ訳への翻訳者が dharma の別名としての svākhyāta “well taught” を saṃkhāta にとり違えた結果に他ならないであろう。従つてこのパーリ文は本来、svākkhāta-dhamma- とあるべきであろうし、第2半詩節は「彼はよく説かれた真理を得得した人たちの16分の1にも値しない」と訳すことができよう。

saṃkhāṭadhamma と svākkhāṭadhamma が混同されたという事実は Jaina 聖典の相当詩頌からも立証される。Uttarajjhāyā 9, 44 に次のような詩頌がある。

māse māse tu jo bālo kusaggeṇa tu bhuñjae,
na so sakkhāyadhammassa kalam agghai solasiṃ.

註釈者 Devendra は sakkhāyadhammassa=svākhyāṭadhamasya を記す。この場合の発展過程はサンスクリット svākhyāta の v が s に同化され、sakkhā(t)a になり、t が y に変化し、sakkhāya となつたと見做すことができよう。すなわち sv-ākhyāta > *sakkhā(t)a > sakkhāya である。

さらに Isibhāsiyāim 41, 13 には
māse māse ya jo bālo kus'aggeṇa āhārae,
ṇa se sukkhāyadhammassa agghatī satimaṃ kalam.

がある。Uttarajjhāyā では sakkhāya- であつたのがここでは sukkhāya- と表記される。もし sukkhāya が正しい読みであるなら、その派生は Skt. svākhyāta > Pāli svākkhāta > *svakkhāta > AMg. sukkhāya となるであろう。

(2) anutthunam

次に Dhp 156:

acaritvā brahmacariyaṃ aladdhā yobbane dhanam,
senti cāpātikhīṇa va purāṇāni anutthunam.

における anutthunam を検討するに、この語はパーリ文献の中でこの詩頌にのみ表われる。Max Müller も Radhakrishnan も “sighing after the past” の訳を与え、現在分詞に解している。Critical Pāli Dictionary (s. v. anutthunāti) も同様に現在分詞にとつている。しかし文法的には anutthunam が単数形、senti が複

数形であるという矛盾が起こる。そこで註釈書をみると *anutthunaṃ* = *anutthunāntā* (複数) としてこの矛盾を解決している。また Andersen は *anutthunaṃ* (単数) と *senti* (複数) の不一致は前詩頌 (155) における *jhāyanti* に対応するために *Senti* と複数形にしたのであろうと推定する。

さてここで Dhṣ 156 に相当する Uv XVII 4:

acaritvā brahmacaryam alabdā yauvane dhanam,

śenti cāpātikirṇā vā pauraṇāny anucintitāḥ.

とガーンダーリー・ダルマパダ (=GDhp) 139B: *poraṇaṇi aṇusvaru*. を検討してみよう。Uv の *anucintitāḥ* は明らかに *anu-√cint* の複数形の現在分詞である。意味は「思い出しながら」となる。GDhp は *aṇusvaro* / *aṇusvaru* でサンスクリット対応語は *anusmaran* となり、やはり「思い出しながら」を意味する現在分詞である。このことから、オリジナルな形は現在分詞であつたことは想定しうるが、それぞれの動詞の語根が異なっており、*anutthunaṃ* を解決する糸口とはならない。

しかしながらビルマ本・シャム本からもやはり *anutthunaṃ* は正しい読みに思われる。そこで *anutthunaṃ* について 2 つの解釈が可能となろう。まず第 1 に、この詩頌はもともと分離していた *pāda* 群から文法に注意が払われずに作詩されたものとみることができよう。いわゆる *patch-work verse* である。

そしてもう 1 つの可能な解釈は *anutthunaṃ* を *ṇamul* タイプの *absolutive* にとることに違いない。*anutthunaṃ* は **anutthūnaṃ* から由来して生起する。すなわち *anutthunaṃ* < **anutthūnaṃ* である。*metre* が *śloka* であるため、U-U が要求され -ū->-u- になつたと解せよう。ただしこのタイプの *absolutive* は W. Geiger, H. Hendriksen, S. Sen 等によつてパーリ語文法の中に引用されていないが、*jhāyaṃ* (Theragāthā 22), *nibbindaṃ* (Therīgāthā 26) 等が現実に *ṇamul* タイプの *absolutive* であることが K. R. Norman 先生によつて立証されている。

F. Edgerton によれば「仏教混淆梵語において -am で終る *gerund* は主動作と同時、あるいは主動作に次ぐ動作に次ぐ動作に言及しつつ、主動詞の副詞的修飾語としてその原型機能を維持する傾向にある」と *ṇamul* タイプの *absolutive* を説明する。従つて Dhṣ 156 は「若い時に梵行 (*brahmacariya*) を実践することなくして財産を得ることのない人たちは折れた弓のように過去を思い悲しんで横たわる」と訳すことができよう。〔紙数の関係上、注は全て割愛〕

(立正大学大学院)